

令和 7 年度 大学等と地域が連携して取り組む地域課題解決プロジェクト
(ふるさとミライカレッジ)

若者の視点を取り入れた過疎地支援
「遠山郷 ESD カレッジ未来共創プロジェクト」

成果報告書

令和 8 年 3 月

長野県飯田市

目次

1. プロジェクトの概要.....	1
1. 背景.....	1
2. 地域課題.....	1
3. プロジェクト及びフィールドワークの内容	2
4. 目標とする地域の成果.....	3
2. プロジェクトの具体的成果.....	4
1. プロジェクトの成果サマリ.....	4
2.1.1 ビジョンの共有.....	4
2.1.2 主体形成.....	4
2.1.3 ネットワーク形成	4
2.1.4 学び・改善のプロセス.....	5
2. プロジェクトおよびフィールドワークの活動実績.....	5
2.2.1 関係人口の基盤組織の創設	5
2.2.2 地域資源を活かした新商品・サービス企画コンペの開催	8
3. 地域の成果と今後の展開.....	11
2.3.1 目標とする地域の成果に対する評価.....	11
2.3.2 今後の展開	13
3. プロジェクトの実施体制	14
1. プロジェクト体制の全体像.....	14
2. プロジェクト体制内の役割.....	14
4. スケジュール	16
5. プロジェクトを通じて得られた効果.....	17
1. 地域における効果.....	17
5.1.1 プロジェクト前後の変化.....	17
5.1.2 得られた示唆.....	17
2. 自治体における効果.....	17
5.2.1 プロジェクト前後の変化	17

5.2.2 得られた示唆	18
3. 大学における効果	18
5.3.1 プロジェクト前後の変化	18
5.3.2 得られた示唆	19
4. 学生における効果	19
5.4.1 プロジェクト前後の変化	19
5.4.2 得られた示唆	19

1. プロジェクトの概要

1. 背景

飯田市には 4 年制大学がなく、進学や就職のため地元を出ていく若者が増えており、人口減少が著しい状況である。特に市街地から離れた中山間地域においては、少子高齢化と過疎化が加速度的に進行しており、地域コミュニティの機能低下や基盤産業である農林業の衰退が深刻な社会問題として顕在化している。

一方で、当地域には古くから交通の要衝としての交流により培われた「学び」と「結い」の風土が存在する。外部の人材や情報を柔軟に受け入れ、独自の価値を創造してきた歴史的背景があり、近年でも全国の大学研究者や学生がこの地を「学びの宝庫」と捉え、調査研究や実習のために数多く訪れていた。飯田市と大学研究者との 1 対 1 の関係から、飯田市を起点に様々な大学研究者が相互につながる有機的なネットワークを形成するために、平成 23 年に全国の大学教員と地域を繋ぐネットワーク組織「学輪 IIDA」を設立した。学輪 IIDA のコンセプトは、「21 世紀型の新しいアカデミーの機能や場づくり」であり、大学研究者同士が相互に知り合い親睦を深めながら、モデル的な研究や取組を地域とともに行っていく試みである。

本プロジェクトの対象地である遠山郷(上村・南信濃地区)は、南アルプスの麓に位置する急峻な地形を有し、古くから林業や茶の産地として栄えてきた。急傾斜地に畑や家屋を作り独特な景観の美しさを見せる「下栗の里」や、400 年以上守り継がれてきた伝統的な「遠山の霜月祭」のように、人間が自然と共生する暮らしが現在も受け継がれており、ユネスコエコパーク・日本ジオパークの両方に登録される貴重なジオロジー(大地)やエコロジー(生態系)の揃った地域である。学輪 IIDA の取組では、特徴的な自然、文化、暮らし等の地域資源に着目し、10 年以上にわたって遠山郷をフィールドとした学びを展開している。

本プロジェクトは、これまでの学輪 IIDA と遠山郷の関わりを一段階引き上げ、持続可能な地域づくりのための実践的な学びの場「遠山郷 ESD カレッジ」を創出することで、関係人口の創出から移住・定住へと繋がる魅力ある環境づくりを目指すものである。

2. 地域課題

遠山郷は南アルプス南部の山間に位置する中山間地域であり、豊かな自然環境と伝統文化を有する一方で、急速な人口減少と高齢化が進行している。若年層の流出が続く、地域の担い手不足が深刻化しており、将来的なまちづくり機能の維持が困難になりつつある。

こうした担い手不足は、地域産業にも深刻な影響を及ぼしている。当地域はかつて、豊かな自然を生かした林業と、冷涼な気候・寒暖差を活かした良質な茶の産地として栄え、斜面に広がる美しい茶畑の景観と茶文化が地域住民の誇りであった。しかし、生産者の高齢化により茶畑の耕作放棄が急速に進み、地域を象徴する景観と文化が失われつつある。

一方で、遠山郷は三遠南信自動車道の整備が進み、近い将来の開通によって信州の南の玄関口となる。また、令和 7 年には温泉ポンプの落下事故により休業していた「道の駅遠山郷」が全面リニューアル

オープンした。このように交流人口が飛躍的に増加することが見込まれる大きな転換期を迎えているが、現状では観光の目玉となるようなサービスや商品に乏しい。地域固有の資源である伝統的な文化、豊かな森林資源等を観光サービスや商品開発へと昇華させることが求められている。

学輪 IIDA としては、これまで実施してきた大学生フィールドワークは、大学研究者が有する飯田の価値や関心事項を学ぶことが主な目的であり、自治体と大学研究者が設計したカリキュラムに学生が参加する形で実施されてきた。しかし、この方法では学生の活動内容が事前に計画された範囲にとどまり、学生の自由度や主体性が十分に発揮されず、地域課題の解決に向けた取組につながりにくいという課題があった。

また、活動期間が限定的で、飯田市との関わりが一過性のものとなりやすく、学生が地域と継続的な関係性を築くところまで到達しにくい状況が生じていた。飯田市には年間 700 名を超える研究者や学生が訪れているが、これらの貴重な人材の力を地域づくりにつなげるためには、地域との関係性を育み「関係人口」として定着させることが重要である。学生が地域の中で主体的・継続的に活動し、地域に深く関与できる仕組みの構築が必要であるという認識が、関係者の間で共有されていた。

3. プロジェクト及びフィールドワークの内容

本プロジェクトでは、月 1 回程度のフィールドワークを通じて、山間過疎地域の振興に向けた実践的な学びの場を創出する。プロジェクトは大きく以下の2つに分けられる。

1. 関係人口の基盤組織の創設

関係人口を創出するための基盤として、インターカレッジ組織「遠山郷クラブ」を創設する。この組織では、毎月遠山郷を訪問し、地域振興イベントへの参加や地域住民との交流を行う。現地活動に併せて、学輪 IIDA 関係者や地域が関心のあるテーマに関連した方を講師に招き、地域に開かれた講座「本棚学習会」を開催し、大学生と地域住民が共に地域づくりへの関心と参画意識を高める。また、現地活動の前後には地元住民の地域コーディネーター（遠山郷クラブ顧問）も交えた定例会議をオンラインで開催し、次回活動の計画および振り返りを行うことで、目的を共有しながら持続可能な地域づくりを推進する。さらに、SNS や地域内の回覧板等を活用して、活動内容を地域内外へ発信する。

2. 地域資源を活かした新商品・サービス企画コンペの開催

地域資源を活用した新商品・サービスの企画コンペを 2 回開催する。第 1 回は「お茶と酵母」、第 2 回は「鳥獣保護管理」「森林資源管理」をテーマとし、専門家によるワークショップやフィールドワークを通じて学びを深める。地域事業者や住民とともに観光サービスや新商品を考案し、商品化・事業化に向けた取組を開始する。

これらのプロジェクトを通じて、学生と地域がともに学び、継続的に地域課題解決の成果を生み出す体制を構築する。また、プロジェクトおよびフィールドワーク内容については、毎年 1 月に開催される学輪 IIDA 全体会において複数の大学研究者に報告・共有するとともに、地域住民にも広くフィードバックする。

4. 目標とする地域の成果

公民館と連携した「遠山郷 ESD 塾」への関わりや、学輪 IIDA 事業の「遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ」での地域に対する学びを起点に、大学生・高校生・地域住民の連携を強化し、地域に継続して関わる大学生の活動を「遠山郷クラブ」としてアップデートすることで、持続可能な地域づくりの実現を目指す。

「遠山郷クラブ」は、大学と地域をつなぎ、学生が主体的・継続的に地域と関わりを持ち続ける基盤となることを目指す。大学生と地域コーディネーター・事業者・住民が繋がる仕組みを構築し、学生と地域がともに学び、継続的に地域課題解決に向けて協働する体制を確立する。

また、地域資源を活用した新商品・サービスの企画コンペにおいて提案された商品・サービスについては、参加者から地域へのフィードバックをもとに次年度以降の商品化・事業化に向けた取り組みを開始することを目指す。

2. プロジェクトの具体的成果

1. プロジェクトの成果サマリ

2.1.1 ビジョンの共有

本プロジェクトでは、伴走支援を行う事業者グラフィックレコードの手法を用いた記録を委託し、地域住民の課題と学生の想いをビジュアル化、言語化して提示することで、課題認識を共有した。活動期間中は1年を通して地域住民の目に留まる場所にグラフィックを掲示することで、参加者だけでなく地域住民にも活動の意図や過程を共有する仕組みとした。

また、企画コンペの提案内容についてもビジュアル化することで、解決を目指すべき課題、商品やサービスに対する思いを視覚的に整理した。さらに、SNSや地域向け紙媒体の通信を発行することで、活動内容を地域内外に広く共有することができた。

2.1.2 主体形成

複数回にわたる現地でのフィールドワークや地域住民との交流を通じて、学生が地域課題を自分ごととして捉えられる素地が整えられ、主体的に向き合いながら商品やアイデアを企画することができた。また、複数大学・異学年の参加により、中心メンバーが卒業後もプロジェクトを継続できる、域外の学生による組織的な主体形成を図った。

現地活動のほか、定例オンライン会議を通じて学生主体で議論を進める機会を設けるとともに、「遠山郷クラブ」を主語とした活動の意味や、そこに関わる理由について考える時間を継続的に設けた。その結果、継続して参加した学生からは、所属する大学や組織の枠を越えて「なぜこの活動に関わるのか」「クラブとしてやってみたいこと」を自分の言葉で語る様子が見られるようになった。

また、対面の話し合いの場では、学生が自ら書記を担当する場面や、新たに参加する学生を案内する役割を担おうとする意見も出されるなど、主体的な関わりが育まれていることが確認された。

2.1.3 ネットワーク形成

大学生と地域を接続し、関係人口を創出するための基盤として、大学の垣根を超えたインターカレッジ組織「遠山郷クラブ」を創設した。本プロジェクトには、「遠山郷クラブ」の学生だけでなく、連携大学教員、上村・南信濃地区まちづくり委員会、地区内各地域団体、飯田市、地域コーディネーター（地域おこし協力隊として遠山郷で活動した経験があり地域住民と幅広いつながりを持つ人物と、市民協働や若者の人材育成などに長く携わり大学連携への理解が深い人物）が参画し、分野や立場を越えた協働関係を構築した。

大学生が複数回地域を訪れることで、地域住民と顔見知りになる機会が増え、個と個の信頼関係の構築につながった。地域住民とのワークショップを通じて学生同士の関係性が深まるとともに、地域住民との対話や共同作業を通じた交流が生まれた。初対面の参加者が多い状況の中でも、安心して意見を出し合える場づくりを重視し、学生と地域住民が互いに「また会いたい」と思える関係性の形成を目指し

た。

振り返りの場では、個人として活動に参加する意味について語り合う時間を設け、個人と「遠山郷クラブ」との関係性を見つめ直す機会とした。実際に振り返りの場では、「遠山郷に来る理由は、誰かに会いたいから」「住んでいないけれど気持ちは住民」「第2の故郷のように感じる」といった感想も聞かれ、地域との関係性が育まれている様子がうかがえた。

2.1.4 学び・改善のプロセス

現地におけるフィールドワークを単発で終わらせるのではなく、現地活動終了後に振り返りと今後の目標設定をオンライン会議で行うことで、継続的な活動サイクルを確立した。また、会議のファシリテーションを学生が輪番で担当することにより、学生が主体的に考え行動する状態を作ることができた。

定例オンライン会議では、課題の解決策を急ぐのではなく、現地で体験した出来事やクラブ活動を進める中で感じた戸惑いなども含めて共有することで、地域理解や取り組み理解を深める学習の機会とした。さらに、地域コーディネーターが把握している地域の声を共有し、それらを参照しながら活動を検討することで、地域の実情を踏まえた活動を進めるための視点を取り入れることができた。これらの取り組みを通じて、地域理解を深めるとともに、活動を持続していく主体の形成につながる学習プロセスが構築された。

企画コンペ終了後は、企画提案に関わった大学生と地域住民が連絡を取り合い、一過性のもので終わらせずに商品化・事業化に向けた事業を開始する動きがみられた。

2. プロジェクトおよびフィールドワークの活動実績

2.2.1 関係人口の基盤組織の創設

(1) プロジェクトおよびフィールドワークの活動内容

1) 目的

大学生と地域の関わりが一過性のものとならないよう、これまでの大学生と遠山郷の関わりを一段階引き上げ、持続可能な地域づくりのための実践的な学びの場を創出する。これにより、関係人口の創出から移住・定住へと繋がる魅力ある環境づくりを目指すための基盤を創設する。

2) 活動方法・内容

毎月遠山郷を訪問し、地域振興イベントへの参加や地域住民との交流を行った。現地活動では、学輪IIDA関係者や地域が関心のあるテーマに関連した方を講師に招き、地域に開かれた講座「本棚学習会」を開催し、大学生と地域住民が共に地域づくりへの関心と参画意識を高めた。また、現地活動の前後には地元住民の地域コーディネーター(遠山郷クラブ顧問)も交えた定例会議をオンラインで開催し、次回

活動の計画および振り返りを行うことで、目的を共有しながら持続可能な地域づくりを推進した。さらに、SNS や地域内の回覧板等を活用して、活動内容を地域内外へ発信した。

3) 活動の工夫点

地域のイベントにブースを出展し、大学生がたびたび遠山郷を訪れて活動していることをより多くの住民に知っていただくとともに、これまでお世話になった地域の皆様を大学生が招いて交流会を実施するなど、関係性の構築に積極的に取り組んだ。また、県外の複数大学がオンライン会議システムを活用して定期的に会議を行い、現地を訪れられない期間においても活動の振り返りや今後の目標を定期的に確認した。

さらに、事業の持続可能性を見据え、モデル事業終了後も学生が自発的に活動を継続できるよう、学生自身が主体となってモチベーションづくりや運営体制について検討を重ねた。また、学生の卒業による世代交代に対応するため、複数学年で組織を構成し、幹事の引継ぎを円滑に行える体制を整備した。加えて、卒業後も関係人口として地域との関わりを持ち続けられるよう、3 月に卒業予定の学生に対しても継続的な参加を呼びかけ、長期的な関係性の構築に取り組んでいる。

(2) プロジェクトおよびフィールドワークの活動結果

遠山郷クラブとして令和 7 年度に計 11 回の現地活動を実施し、世代を超えた協働による地域づくりを推進することができた。

12 月までの計 9 回のフィールドワークの成果については、1 月に開催した「学輪 IIDA 全体会」(飯田市をフィールドに研究・活動する大学研究者や学生が一堂に会し、地域と連携して成果報告や交流を行う年 1 回の会議)において報告を行った。また、2 月には遠山郷 2 地区向けの報告会を実施し、活動内容について地域住民を交えて振り返りを行うとともに、次年度以降の活動継続へ向けた意見交換を行った。

報告会に参加できない方々に向けては、SNS や地域内の回覧板等を活用し、活動内容を地域内外へ広く発信した。



◎ 遠山郷クラブ【とおやま号】
令和8年2月7日発行

遠山郷クラブとは
都留文科大学、東京農工大学、白梅学園大学等の大学生が主体となる
「インターカレッジ/ハイスchool型」の組織です！

遠山郷は大学生のフィールドワーク等を受け入れていただいています。
→これまでの取り組みを組織化し、地域の方々と連携をはかりながら
遠山郷の未来を共に考え、持続的な活動を目指しています！！

これまでの活動

5月11日 遠山郷クラブ発足式農工大
7月11～13日 キックオフイベント・体験学習
8月3～6日 ESO塾
9月10～12日 企画コンペ事前学習
13～15日 エコ・ジオパーク
フィールドス＆ディ
20～22日 企画コンペ
(テーマ：お茶と餅母)

10月3～5日 道の駅遠山郷
オープニングイベント
11月1～3日 歴系の会10周年・輪じよの遠山
14～16日 おもてなし会・ブルーベリー染め
12月19～21日 商品・サービス企画コンペ2
1月23～25日 学輪IIDA全体会・展示と発表
2月6～8日 振り返り・次年度計画

企画コンペ
全国各地から集まった大学生と
地域の方々の交流の機会。
ユニークな商品開発やサービスの提案が行われました。
Vol.1～お茶と餅母～

コース	テーマ	参加者	審査員	結果
お茶と餅母	お茶と餅母	都留文科大学	白梅学園大学	東京農工大学
お茶と餅母	お茶と餅母	都留文科大学	白梅学園大学	東京農工大学
お茶と餅母	お茶と餅母	都留文科大学	白梅学園大学	東京農工大学

Vol.2～鳥獣保護管理や森林資源管理～

学輪IIDA全体会・展示と発表
毎日、エスプラザで行われた学輪IIDAにて、遠山郷を紹介しました。
実際に撮影したデジタルフォトも展示し、期間にかかわる様々な方にも
がスターなどを見ていただきました。
また、全体会でも披露させていただきました。
活動の様子や大学生として感じることをお聞きいただきました！

インスタはこちら→

発行 遠山郷クラブ大学生
発行先 都留文科大学・東京農工大学・白梅学園大学
110055-27-4071 (内線2051)
掲載もありがとうございます！

(3) プロジェクトおよびフィールドワークの成果

参加した大学生が地域に継続して関わり、地域住民とともに活動し、地域への愛着を深め、関係人口を創出していくための基盤として「遠山郷クラブ」を創設した。

また、活動を行う中で、地域の方から大学生の活動拠点として古民家を紹介いただき、所有者との相談の上、使用許可を得ることができた。この拠点は、今後の活動を展開する上で重要な役割を果たすことが期待される。

大学生が複数回地域を訪れることで、地域住民と顔見知りになる機会が増え、相互の信頼関係の構築につながった。

2.2.2 地域資源を活かした新商品・サービス企画コンペの開催

(1) プロジェクトおよびフィールドワークの活動内容

1) 目的

これまで実施してきた「遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ」等の学びの成果をさらに発展させる実践の場づくりとして、大学生と地域住民が協働で地域資源を活用した取り組みを行う。具体的には、茶畑管理や茶葉の加工・発酵技術を活かした商品開発、鳥獣保護体験、森林資源活用などの体験を通じて、地域資源を活かした新たな商品やサービスの提案を行い、地域事業者・専門家とともに実現を目指す。

これにより、地域の魅力発信と経済活性化につなげることを目的とする。ただし、商品やサービスの企画・開発を最終目的とするのではなく、あくまで「地域を学び、地域とともにつくるプロセス」と位置づけ、地域に根ざした価値創造のあり方を模索していくことを重視する。

2) 活動方法・内容

第1回は「お茶と酵母」、第2回は「鳥獣保護管理」「森林資源管理」をテーマとし、地域資源を活用した新商品・サービスの企画コンペを2回開催した。いずれも学生だけでなく地域からの参加者を募り、地域と学生の協働による学びの場とした。

【第1回:お茶と酵母】

初日は、地域の方と学生によるグループワークを行った後、お茶製品の商品開発や国内販路拡大支援、中東・東南アジアを中心とした貿易支援を手掛ける外部講師、および学生の力を活用したふるさと納税支援の事例紹介者を招き、基調講演を実施した。商品開発についての知識を深めた後、商品・サービス提案ワークショップを行った。

2日目は「お茶と酵母」をテーマに、地域で活動する個人、事業者、団体の活動に学生が帯同してフィールドワークを行いながら、商品・サービスを考案し、プレゼン資料を作成した。

3日目は地域の方々を招き、公開プレゼンテーション・審査会を開催した。

【第2回:鳥獣保護管理・森林資源管理】

事前学習として、森林活用、森林研究、遠山郷における鳥獣保護管理の現状の3つをテーマとした基調講演の動画配信、商品・サービス提案ワークショップのオンライン講座を実施した。

対面初日は、地域の方と学生によるグループワークを行い、それぞれの課題意識や興味関心を共有した。

2日目は、森林資源やジビエをすでに活用している地域外の講師を招き、ワークショップや現地視察を通じた体験学習を実施した。地域の参加者にも気軽に楽しみながら参加いただき、大学生とともに多様な活用事例を体験することで、新たなアイデアの創出につなげた。

3日目は地域の方々を招き、公開プレゼンテーション・審査会を開催した。

3) 活動の工夫点

第 1 回は、地域になじみの深い特産物や地域資源の活用をテーマに、既にそれらを活用した活動を行っている地域の個人、事業者、団体に参加してもらい、そこに学生が参画して新たな視点から商品やサービスを考える組み立てとした。既存の取り組みをさらに発展させる「1 を 100 にするアイデアコンペ」として位置づけ、地域資源の可能性を最大化することを目指した。

第 2 回は、遠山郷における森林資源管理および鳥獣保護管理の現状と課題を中心テーマとし、地域外から講師を招いて地域の方々とともに課題の実態と実践事例を学んだ。「内からの視点」と「外からの視点」を掛け合わせて課題解決の方向性を考える「0 から 1 を創り出すアイデアコンペ」として位置づけ、新たな価値創造に挑戦した。

(2) プロジェクトおよびフィールドワークの活動結果

学生だけではなく、地域づくりに意欲的な地域住民にも参加いただき、地域と大学が共創するアイデアコンペとなった。

第 1 回では 5 件、第 2 回では 3 件の商品・サービスが考案された。具体的には、遠山郷の名産品であるお茶を使った商品を扱うカフェの開店企画、年間数百 kg が廃棄される遠山郷産ブルーベリーを活用した染色体験の提案、埋没等で廃棄処分されてしまう有害鳥獣のジビエと遠山郷の特産品を組み合わせたサブスクリプションサービスなど、地域資源の有効活用と新たな価値創出を目指した多様なアイデアが生まれた。



(3) プロジェクトおよびフィールドワークの成果

これまで実施していた「遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ」では、「地域を学ぶ」「地域とともにつくる」プロセスを重視して活動を継続してきたが、企画コンペではこれまでの学びの成果をさらに発展させる実践の場となり、地域の方々と対等な立場で協働し、地域の魅力発信と経済活性化の可能性を共に考える、これまでの活動から一歩進んだ取り組みとなった。

企画コンペ終了後も、地域参加者と大学生が直接連絡を取り合い、現地活動に合わせて考案商品の試作を行うなど、具体的な動きが生まれている。

さらに、事業化の実現に向けて、地域住民と大学生が参加して地域外への視察研修を実施するなど、新たな展開も始まっており、今後の進展が期待される。

3. 地域の成果と今後の展開

2.3.1 目標とする地域の成果に対する評価

遠山郷におけるフィールドスタディ等に参加した大学生が地域に継続して関わり、地域住民とともに活動し、地域への愛着を深め、関係人口を創出していくための基盤として「遠山郷クラブ」を創設した。

9 月には、地域の特産品である「お茶と酵母」をテーマに、専門家を招いて特産品開発や販路開拓について学び、お茶畑などでのフィールドワークを通して地域の現状を把握した。地域で事業を行う住民と大学生がチームを組んで商品・サービスを考案する企画コンペを開催し、現在はコンペで提案した企画を基に、地域事業者と大学生が協働して商品化、事業化に向けた取組が見られている。

12 月には、「鳥獣保護管理」「森林資源管理」をテーマとした 2 回目の商品・サービス開発コンペを実施した。各分野の専門家を講師に招き、体験学習を通じて、大学生ならではの外部の視点と地域の方々が持つ内部の視点を融合させた、独創的な企画が生まれた。

大学生が複数回地域を訪れることで、地域住民と顔見知りになる機会が増え、信頼関係の構築につながっている。地域のイベントにブースを出展し、大学生がたびたび遠山郷を訪れて活動していることをより多くの住民に知ってもらえるようにしたほか、これまでにお世話になった地域の方々を招いて交流会を実施するなど、継続的な関係性の構築に取り組んでいる。

目標とする地域の成果(実施計画書)	達成状況・結果評価
学輪 IIDA 事業の「遠山郷 ESD 塾」や「遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ」を基盤に、大学生・高校生・地域住民の連携を強化し、地域に継続して関わる「遠山郷クラブ」としてアップデートすることで、持続可能な地域づくりの実現を目指す。	○ 公民館と連携した「遠山郷 ESD 塾」への関わりや、学輪 IIDA 事業の「遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ」での学びを起点に、関係人口を創出していくための基盤として、学生主体のインターカレッジ／ハイスクール型の組織、「遠山郷クラブ」を創設し、11 回の現地活動を実施。(参加学生計 74 名、のべ 154 名、参加大学等 17 校)
地域団体が企画している「お茶摘み体験」や、地元猟師と共に山中を歩く「狩猟ツアー体験」のモニターツアーを計 2 回実施し、参加者からのフィードバックをもとに次年度以降の旅行商品化を目指す。	○ 「お茶と酵母」や、「鳥獣保護管理」「森林資源管理」をテーマとした商品・サービス企画コンペを計 2 回実施し、計 8 件の商品・サービスが学生・地域住民によって考案された。本年度は商品化には至っていないが、地域参加者と大学生が直接連絡を取り合い、現地活動に合わせて考案商品の試作を行うなどの動きが生まれている。
地域団体が管理する茶畑において、整枝、施肥、茶摘みなどの管理作業を実施し、5 kg の茶葉を収穫・製茶する。製茶したお茶	○ 地域団体が管理する茶畑において、整枝、施肥、茶摘みなどの一連の管理作業および製茶を実施した結果、7kg の茶葉を生産することがで

は、発酵技術を活用した商品開発に利用することで、地域資源の付加価値を高める。また、耕作放棄された茶畑1箇所を新たに整備(草刈り・施肥など)し、定植を行うことで、次年度の茶摘みにつなげ、地域の茶産業の復興を目指す。		きた。 また、第1回企画コンペにおいては、茶畑とそこで生産した茶葉を活用した商品・サービスの考案を行い、地域資源の活用方法について具体的な提案を行った。
飯伊森林組合の指導の下、草刈り、間伐、枝打ちなどの林業体験を実施し、森林への理解を深める。また、間伐材の有効活用方法を検討し、森林の適切な整備と保全を促進する。さらに、整備した森林エリアにおいて、地域資源を活用した商品開発の可能性を探ることで、地域の資源価値を向上させる。	○	第2回企画コンペでは、「鳥獣保護管理」「森林資源管理」をテーマに設定した。 事前学習として、地元猟師や全国で森林活用・森林研究に携わる専門家から講義を受け、参加者の森林に関する理解を深めることができた。 その上で、現地活動では地域外から講師を招いて実践事例について学ぶとともに、遠山郷の森林エリアにおける地域資源を活かした商品・サービス開発の可能性について、具体的な検討を行った。
農産物加工場(上村・南信濃の2か所)を整備し、加工体験や技術研修を実施することで、次年度以降の継続的な加工場の活用を推進する。さらに、地域の特産品(遠山茶・発酵食品・ジビエ・国産材など)や観光資源を活用した新たな商品・サービスの開発アイデアを提案し、2025年秋にグランドオープンする道の駅「遠山郷かぐらの湯」において、オリジナル商品の販売を目指す。	△	地域の特産品(遠山茶・発酵食品・ジビエ・国産材など)や観光資源を活用した新たな商品・サービスについて、学生・地域住民による企画コンペを実施し、計8件の開発アイデアが考案された。本年度はアイデア創出までの実施となり、オリジナル商品の製造・販売には至らなかったが、今後の商品化に向けた基盤を構築することができた。 農産物加工場の整備は本年度中には実施しなかったものの、今後の活動の進展に伴い、必要性が生じた場合に実施していく。
毎年秋に開催される「輪っしょい遠山」イベントにて、開発した商品・サービスを来場者に提供し、消費者のフィードバックを収集することで、商品・サービスのブラッシュアップを図る。	○	第1回企画コンペで開発した商品・サービスのプロモーション活動として、「輪っしょい遠山」の来場者への紹介を行った。 本年度は試作段階であったため実際の商品提供には至らなかったが、商品開発に使用した地域の特産品であるお茶の販売や試飲を通じて、開発コンセプトや活動内容を来場者にPRすることができた。

2.3.2 今後の展開

今後は遠山郷クラブが自主的・持続的な活動となるよう、毎月定例活動を設けて拠点に滞在しながら地域住民と協働で農作業や拠点整備、商品の具体化等を進めていく。

(1) 遠山郷クラブの組織化

まず、遠山郷クラブの活動基盤を確立するため、定例地域活動、プロジェクト・ベース活動、活動の記録・発信という3つの柱を設定する。

定例地域活動では、地域に根ざした継続的な取組として、活動拠点の環境整備や維持管理、地域住民との協働作業を行う。これにより、日常的な交流を通じた信頼関係の構築と実践的な学びの機会を創出する。

プロジェクト・ベース活動では、地域課題解決や資源活用をテーマとした期間限定・目的志向型の取組を展開する。具体的には、今年度の企画コンペで提案された商品・サービスの商品化に向けた実践活動、地域行事への参画・運営補助を通じた地域との関係構築と理解の深化などを図る。

活動の記録・発信では、活動の可視化と学びの成果を地域に還元し、新たな関係構築につなげる。SNS を活用した継続的な情報発信を行うとともに、地域向け回覧に遠山郷クラブ通信「とおやま号」を作成・発行し、活動報告、写真、簡易レポート等をまとめて地域住民、大学等と共有する。

(2) 学習・交流プログラムの開催

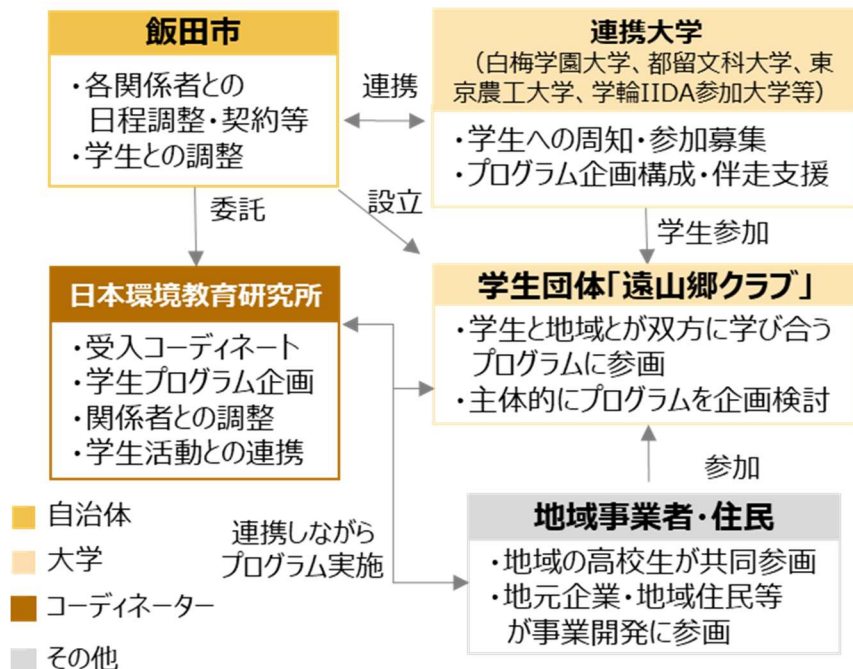
地域との学びと交流を深めるため、地域と連携した学習会を開催するほか、持続可能な地域づくりをテーマにした小中学生との協働学習会、商品開発に向けた実践型イベント等を展開する。

(3) 関係者連絡会議

事業全体の共有と振り返りを目的とした関係者連絡会議を開催する。遠山郷クラブによる活動報告、地域住民および大学教員等との意見交換、次期活動に向けた確認・調整等を行う。これにより、多様な関係者間での情報共有と相互理解を深め、活動の質的向上を図る。

3. プロジェクトの実施体制

1. プロジェクト体制の全体像



2. プロジェクト体制内の役割

所属/氏名	本プロジェクトにおける役割
自治体	
飯田市大学誘致連携推進室	大学・地域コーディネーター・伴走支援者との連絡調整、学生の参加調整、フィールドワークの管理運営、委託・保険等の各種契約、費用支払い
大学高等教育機関	
都留文科大学 准教授 田開先生 白梅学園大学 教授 朝岡先生 東京農工大学 講師 大倉先生 その他 学輪 IIDA 関係大学	自治体・伴走支援者との調整、外部講師の調整、学生へ周知・参加募集、企画構成
学生団体	
遠山郷クラブ	地域活動への参画、商品開発等のアイデア発想・実現に向けた検討、遠山郷クラブの学生間の連携、学生企画の検討
コーディネーター	
日本環境教育研究所	地域における教員・学生の受入コーディネート、関係者との調整業務

株式会社たがやす	企画運営支援、コアチームのプロジェクトマネジメント支援、 ワークショップのイベントの企画運営進行、報告書作成支援
プロジェクト参加学生(参加学生計 74 名、のべ 154 名)	
都留文科大学 26 名	「遠山郷クラブ」学生と同じ。
白梅学園大学 11名	
東京農工大学 7名	
学習院大学 4名	
和歌山大学 6名	
淑徳大学 4名	
尚絅大学 4名	
中部学院大学短期大学部 2名	
東京造形大学 1名	
富山県立大学 1名	
武蔵野美術大学 1名	
京都大学 1名	
国際基督教大学 1名	
総合研究大学院大学 1名	
成城大学 1名	
帝京科学大学 1名	
公益社団法人キープ協会実習生 2名	

4. スケジュール

実施時期	活動実績
2025年7月	7/11-13 キックオフイベントの開催 (2.5 日間/大学生 19 名、教員 5 名参加)
2025年 8 月	8/4-6 遠山郷 ESD 塾の企画運営・参加 (3 日間/大学生 12 名、教員4 名参加)
2025年 9 月	9/10-12 大学生×地域の共創アイデアコンペ Vol.1実施に向けた現地事前学習の実施(2.5 日間/大学生 4 名、教員1名参加) 9/13-15 遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディの実施(2 日間/大学生 24 名、教員7名参加) 9/20-22 大学生×地域の共創アイデアコンペ Vol.1実施(2.5 日間/大学生 17 名、教員5名参加)
2025年 10 月	10/4-5 「道の駅遠山郷」オープニングイベントへの出店 (2 日間/大学生 10 名、教員2名参加)
2025年11月	11/1-3 「輪っしょい遠山」へのブース出展(2.5 日間/大学生 15 名、教員 3名参加) 11/15-16 大学生×地域の共創アイデアコンペ Vol.1提案商品の試作(2 日間/大学生 15 名、教員3名参加)
2025年12月	12/19-21 大学生×地域の共創アイデアコンペ Vol.2 実施(2 日間/大学生 10 名、教員 6 名参加)
2026年1月	1/23-25「学輪 IIDA 全体会」での成果報告、学生サミットの開催(2日間/大学生 20 名参加)※教員は「学輪 IIDA 全体会」へ参加
2026年2月	2/7-8 遠山郷2地区向け報告会・交流会、次年度に向けた打合せ(2日間/大学生 15 名、教員 3 名参加)

5. プロジェクトを通じて得られた効果

1. 地域における効果

5.1.1 プロジェクト前後の変化

飯田市遠山郷では、人口減少や高齢化の進行に伴い、地域コミュニティの機能低下や担い手不足が課題となっていた。特に、基盤産業である農林業の衰退により、茶畑の耕作放棄が進むなど、地域の景観や伝統文化の維持にも影響が生じていた。また、これまでも大学と連携した取組は行われていたものの、学生の関わりが短期的・一過性にとどまりやすく、継続的な関係人口の形成には課題があった。

本プロジェクトでは、学生が継続的に地域を訪れ、「本棚学習会」や各種イベント等を通じて地域住民と交流を重ねたことで、外部の視点から捉えた地域の魅力や可能性を学生から地域住民に数多く伝えることができ、地域の方々が森林資源や茶文化など地域固有の魅力や価値を再発見・再認識する機会となり、また、地域住民が大学生の活動を身近に感じる中で、地域づくりへの興味関心など、主体的な参画意識が醸成された。加えて、「お茶と酵母」や「鳥獣保護・森林資源管理」をテーマとした企画コンペでは、学生と住民が対等な立場で協働し、お茶を活用したカフェ企画、廃棄ブルーベリーの活用やジビエのサブスクリプションなどの具体的なアイデアが生まれ、議論にとどまらない実践的な動きへと発展した。

5.1.2 得られた示唆

元々地域と大学がつながる土台が存在していたことは、当地域における強みであることが改めて認識された。持続可能な地域づくりのためには、単発的な交流にとどまらず、長期的な若者と地元の関係性の構築が必要であると思われる。特に、本プロジェクトのように、学生と地域住民が対等な立場で学び合い、具体的なテーマに基づいて協働するプロセスを重視することで、地域資源の新たな活用可能性が引き出されやすいことが示唆された。

また、学生の真摯な取り組みに触発され、地域住民自身の当事者意識や行動力が高まる相乗効果が生まれることが示唆された。今後は、こうした関係性や学びを一過性のものにせず、継続的な交流や共創の場を維持する仕組みを整えることが重要であり、他地域においても、住民と外部人材が具体的な目標に向かって協働できるプラットフォームの構築が有効であると考えられる。

2. 自治体における効果

5.2.1 プロジェクト前後の変化

飯田市では、これまでも「学輪 IIDA」等を通じて全国の大学研究者や学生とのネットワークを形成し、大学連携に取り組んできたが、従来のフィールドワークは教員や自治体が設計した枠組みに学生が参加する形式が中心であり、学生の主体性が十分に発揮されにくい面があった。そのため、地域課題の具体的な解決や、学生が継続的に地域と関わる関係人口として定着することには一定の難しさがあった。

また、特定の団体と協力関係にある大学生は存在したものの、エリア・地域全体とつながる大学生団体は存在しなかった。

本プロジェクトにより遠山郷クラブが発足したことで、大学教員を介さずとも学生が自主的に活動に参加できる体制が整備され、卒業後も継続的に関わることができる基盤が構築された。

また、学生主体の組織である「遠山郷クラブ」の活動を支援する中で、学生の新鮮な視点や発想力とともに地域の新たな価値を創出したいと考える住民を発掘することができた。学生と地域との距離感の変化を捉え、次の活動の展開を地区の自治振興センター所長や公民館主事と今後の活動展開について協議し、地元行事に新たな取り組みを加えることができた。これにより、行政と地域、学生との新たな連携の形が生まれ、地域内での受入れや協働の機運が広がった。

5.2.2 得られた示唆

企画コンペのような具体的な協働の場を設けることで、地域づくりに意欲的な住民を発掘できることが示唆された。漠然とした呼びかけではなく、地域コーディネーターを経由して明確な目的と活動内容を示したことが、潜在的な担い手の顕在化につながった。

一方で、本プロジェクトで設立された「遠山郷クラブ」を自治体や地域がバックアップし、継続的な活動として定着させるためには、学生が取り組みたい活動と地域のニーズを適切にマッチングさせ、地域に対して具体的な成果を生み出していくことが重要である。活動の初期段階では地区内の関心のある個人から始めることも有効だが、その後、地区全体にとって有益な取り組みであると認識されることが、持続可能な活動の鍵となる。

3. 大学における効果

5.3.1 プロジェクト前後の変化

大学が遠山郷に関わり始めて10年以上が経過する中で、本プロジェクトを通じて新たな段階に到達することができた。

第1段階では、大学が授業として教員が学生を引率し、地域住民の話を聞く一方向的な学びが中心であった。第2段階として、授業の枠を超えた学輪IIDA共通カリキュラムの一環として、大学生だけでなく地元の高校生とともに、ユネスコエコパーク・日本ジオパークに登録される遠山郷の地域資源を学び、その成果を地域住民に発表・還元することで地域の魅力の価値化を図る「遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ」が展開され、複数大学によるインターカレッジ形式の取り組みが始まった。これと同時期に、地区公民館と大学が連携し、地元の小中学生の自然体験活動の提案・価値化を図る「遠山郷E SD塾」が始まり、具体的な協働関係を構築し始めた。これまでは大学教員が企画・立案したプログラムに学生を参加させる教員主導型の活動中心であり、学生は用意された枠組みの中で活動することが多かった。そのため、地域との関わりが一過性の経験にとどまりやすく、学生自身が主体的に地域課題に向き合う機会には限界があった。

本プロジェクトでは、複数大学の学生が参画するインターカレッジ組織「遠山郷クラブ」が立ち上がり、学生が主体となって企画・運営を行い地域と直接関わる第3段階へと移行し、大学間の連携や学生同

士のネットワーク形成も進んだ。オンラインでの定例会議や学生によるファシリテーションの輪番制等も取り入れられ、学生が主体的に学び、実践し、改善していくプロセスが定着した。

5.3.2 得られた示唆

学生が企画・運営の主体となることで、地域との関わりに対する当事者意識と責任感が向上することが示唆された。また、複数大学・異学年の学生が関わる仕組みは、互いの専門性や視点を共有し合う機会となり、学びの質を高める効果があると考えられる。地域を「訪れて学ぶ場」から、「自ら関わり価値を生み出す場」へと転換することで、教育的意義も大きく高まった。

また、遠山郷クラブの活動が軌道に乗るまでは教員は完全に手を離すのではなく適切な距離感でのサポート体制を維持することが活動を持続させるために必要だと思われる。特に、学生の卒業に伴う知識や経験の喪失を防ぐためには、複数学年による組織構成や、幹事等の役割の円滑な引継ぎ体制を整えることが重要である。今後、他地域と連携する場合においても、学生に十分な裁量を与えつつ、教員が下支えする仕組みが有効であると考えられる。

4. 学生における効果

5.4.1 プロジェクト前後の変化

プロジェクト前は、学生は大学教員と市が企画したプログラムに参加者として年に1～2度同行する立場であり、地域との関わりにおいて受動的な役割に留まっていた。短期間の訪問では、地域課題の複雑さや背景を十分に理解することが難しく、地域住民との継続的な関係構築にも限界があった。

プロジェクト実施後は、学生自身が企画・運営の主体となり、地域住民と直接対話しながら活動を展開する形態へと変化した。月1回程度の継続的な現地訪問や、オンライン会議を組み合わせた活動を通じて、学生は地域課題を単なる学習テーマとしてではなく、自ら関わるべき「自分ごと」として捉えるようになった。また、企画コンペでは、お茶を活用したカフェ企画や廃棄ブルーベリーを活用した染色体験など、学生ならではの視点を生かした具体的な提案が生まれた。さらに、コンペ終了後も地域住民と個別に連絡を取り合い、試作や視察研修の検討を進めるなど、自発的かつ継続的な行動が見られるようになった。SNSの活用や地域向け通信「とおやま号」の発行など、情報発信面でも新たな取組が生まれている。

5.4.2 得られた示唆

異なる大学間での活動を通じた繋がりや専門性を共有し合う場面が見られた。これにより、学生の当事者意識や主体性が向上し、地域課題を自分ごととして捉えるようになるとともに、自発的・継続的に地域と関わる姿勢が醸成された。特に、「遠山郷クラブ」というインターカレッジ組織の存在は、他大学の学生と刺激を受け合いながら学びを深める基盤として有効であり、学生の成長を後押ししたと考えられる。

また、現地活動とオンライン会議を組み合わせた継続的な学びと改善のプロセスは、学生のモチベーション維持や主体的行動の促進に有効であることが示唆された。一方で、モデル事業終了後も活動を継続していくためには、交通費等を含む活動資金面での支援の仕組みづくりが課題である。今後同様の取組を進めるに当たっては、学生が継続的に地域へ足を運べる物理的・経済的な支援と、卒業後も関係人口として関わり続けられる柔軟なコミュニティ設計をあわせて整えていくことが重要である。なお、本年度のプロジェクトでは旅費や宿泊費を完全支給したが、大学を通じて参加を募った際、事業のねらい通り複数回参加する学生、あるいは一度のみ参加して継続的には関わらない学生が存在した。このことから、遠山郷での活動が学生にとっての自己実現の場となり、「通い続けたい」と思える魅力があることが、継続的な参加につながると示唆された。すなわち、活動の中で満足感や自己有用感を得られるかどうか、学生の継続的な参加意欲を左右する重要な要因であることが明らかになった。

令和 7 年度大学等と地域が連携して取り組む地域課題解決プロジェクト(ふるさとミライカレッジ)
成果報告書

若者の視点を取り入れた過疎地支援「遠山郷 ESD カレッジ未来共創プロジェクト」

令和8年3月13 日

長野県飯田市
